
真実の螺旋

ナイヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実の螺旋

【Nコード】

N7459H

【作者名】

ナイヤ

【あらすじ】

主人公黒宮裕。平和に過ごした日常。やって来た転入生。周りの友人。一瞬で起きた出来事から連鎖するように変化する日常。それは巡り合うかのように裕達は体験する。

ブローグ

「・・・・・・・・」

只今授業中にボーと外を眺めている俺。教室は2年A組。

「・・・・・・・・」

「ねえ、裕？」

「・・・・・・・・」

「裕？おい」

「え・・・・何？」

ようやく気づいた俺。

俺の隣の席に座る女子 金宮かなざき 愛美あゆみが俺を呼んでいた。

「やっと気づいた。HRだよ？ボーとしちゃ駄目だよ」

愛美とは中学の時に知り合った。それ以来良く喋る友人になっている。

そしてお隣さんでもあるという。

「そうだよ裕。可愛い可愛い愛美ちゃんが注意しているんだから気をつけるよ」

俺の前の席に座る男 雪崎ゆきざき 茂樹しげきが言ってくる。

茂樹も中学の時に知り合っている。現在は生徒会の副会長に役任している。

顔立ちが良くてカッコイイけど……。

「愛美ちゃん。裕なんか放つといて、俺に構ってよ」

それなりにおちゃらけている。結構顔が良いのに、その性格のせいで大幅にマイナスされているようだ。

「HRだろ」

俺は筆箱を持って茂樹の頭に叩きつけた。

「いてて……。分かったよ」

こんな感じで俺たちはいる。

俺の紹介？じゃあ簡略にして、名前は黒宮 裕（黒宮 裕）
自分の事だからあまり言う事はないや。以上で。

俺たちは私立織宮学園2年E組に所属。
ちなみに中高一貫だから知り合いは多くいる。

今は9月の始め。夏休みが終わって何事も無く平和に過ごしている。

「転入生どんな子だろうね？」

「え？」

愛美がいきなり言ってくる。転入生？

「ここに転入生が来るんだよ。しかも女子！
俺の計画に更なる改革が来たぞ！」

「雪崎！うるさいぞ！」

調子にのっている茂樹を担任が注意した。
確かにうるさかったな。

「転入生か・・・」

どんな子だろうなと気になった。

「では、紹介するぞ。入ってくれ」

先生の合図に転入生は入ってきた。

・・・。。。。。。。

全員沈黙したと思ったら。

おーーーーー！！！！

歓喜に溢れていた。主に男子が。

黒のセミロングの髪。肌も白く。上品良さそうな女性。お嬢様とも
言える。

「静かに。自己紹介を」

周りが静かになる。そして女子が紹介をする。

そして俺はその女子を見ながら顔を引きつっていた。

・・・そんな、まさか彼女だったなんて。

「秋宮 美里といいます。先日ドイツから日本に来ました。慣れない事があるので色々教えてください。よろしくお願いします。」

「キター！帰国子女！そして容姿端麗！最高だ！野郎共！最高すぎるぞ！」

「雪崎！うるさいぞ！」

また注意を受ける茂樹。だけど俺は気にしていなかった。ずっとその彼女を見続けているからだ。

「ねえねえ。ドイツから来たって。裕と同じだね」

ああ・・・確かに同じだ。俺は中学入学の時に日本へ来た。

「席は窓際の後ろだ」

先生が指定した席は俺の隣の愛美の後ろ。

彼女がやって来る。そして俺の隣へ止まって俺を見た！

「・・・・・・・・」

俺は黙る。何も言わないで！お願い！

「久しぶり、裕」

「ああ・・・久しぶりだね」

そんな俺たちのやりとりにクラスの皆が注目する。茂樹も愛美も呆然とする。

・・・凄く視線を感じて痛い。

「また会えて嬉しいわ」

そう言ってニコッと笑う。

彼女は俺がドイツに在住していた時の幼馴染。彼女が今来たんだ。

運命は廻る。あらかじめ配置された駒が必然的に巡るように俺たちも巡り合う。

それが運命だからだ。

さりげない日々

放課後。

美里はHRが終わってから大人気だった。

他のクラスからも見に来ている人も。美里は持ち前の明るさで皆に接している。

そして俺にもさっきのやりとりのせいで、彼女との関係を問われていた。

大変だったな。

「まさか裕の知り合いだったとはなー」

「驚いたよ、本当に。何も知らなかったよ」

「連絡していなかったのか？」

「月に数回くらい。でも、ここへ来ることは知らされなかったよ。それにしても茂樹、いいのか？もう質問とかしなくて？」

茂樹は朝の時に美里に質問を多くしていた。

あの暴走は誰にも止められいな。

「ほら、俺が美里ちゃんと一緒ばかりだと他の女子が嫉妬するだろ？」

そういう理由か……。

「おつ。成斗は帰るのか？美里ちゃんに興味は？」

茂樹が声を掛けた生徒。清水 成斗。

1年前に知り合った友人で、性格は少しぶっきらぼうなクールという感じ。

「帰るよ。それにそこまで興味を持つ気はない。早く帰らないと・・」

「成斗ー！」

教室の扉が勢いよく開けられる。そこにいたのはB組にいる同級生の秋道 由理音。

セミロングの茶髪に気品良い顔。どこか大人っぽい雰囲気漂わせる。

成斗と一緒に知り合った彼女は常に成斗にいる。

「やべー！じゃあな」

成斗はすぐに逃げるように教室から出る。由理音が苦手なようだ。

「待って！」

そして追いかけて由理音も教室を出た。廊下走ってるから気をつけて。

「俺も帰るよ。行こう愛美」

「うん」

俺達は家が隣同士の為、よく一緒に帰る。

「いいな。俺も一緒に帰りたい！」

駄々をこねるように茂樹が言う。

「茂樹君の家反対方向だもんね」

「うう」

茂樹を放っておいて俺と歩美は教室から出る。

俺はふと皆に囲まれている美里を見た。そして彼女は俺に気づき手を振る。笑顔で。その一瞬。

「どうしたの？」

愛美が心配そうに聞いた。

「う・ううん。何でもないよ」

一瞬ゾクリと何かを感じた。何だ・・・何なんだ？

愛美と下校中。

「ねえ、裕と赤坂さんって・・・どんな関係？」

少し戸惑いながら聞いてくる。

「うーん。趣味の共通点で気が合った仲間かな？」

「あ！確かに赤坂さんクラシック好きだったよね」

俺はクラシック関係の音楽を趣味でやっている。
たまに時間があればピアノとバイオリンを弾いている。
本当に・・・たまにだけ。

家の前で愛美は別れて愛美は左の隣の家に玄関に入る。

あれ？右の隣の家ってあんな感じだったけ？最近良く見てなかったけど、構造も少し変わっている。今度その家に住んでいるサラリーマンの石田さんに聞いてみよう。

「おかえり、裕」

家に帰ると母さんが出迎えてくれた。

「どうだった、美里ちゃん？」

「知ってたの？」

「知ってたわよ。ちなみ裕にだけ内緒」

「かなり驚いたよ」

ピンポンと誰かが来た合図が家に鳴る。

「裕、出てきて」

「うん」

俺はドアを開ける。そこには・・・。

「どつもっ」

美里がいた。

「……………どうも」

俺はぎこちなく返事する。

「久しぶりだから会いにきたよ」

「ああ、そっか」

「それと、お隣さんさから兼ねての挨拶で」

「……………お隣？」

「右の家よ」

「え……………？」

俺はすぐに右の隣の家のドアの前に来た。

そこに書かれている名前は「石田」ではなく「赤坂」だった。

「……………」

啞然とする俺。

「どうですか？」

俺の隣に美里が来た。

「……この家の人は？」

「石田さんは父からお願いしたらすんなりと渡してくれました」

石田さん！！

あのお父さんには逆らえなかったのか。逆らったら家族全員で路頭にさ迷ってしまうからね。

優しい優しい石田さん……。お世話になってくれた石田さん。お元気で。

「あら裕？どうしたの？」

家から母さんが出てきた。

どうしたの？って……。母さんこそどうしたんだよ。

「久しぶりね、美里ちゃん」

「お久しぶりです」

「早くいらっしやい。赤坂家の歓迎会をするんだから」

「はい。行きましょ、裕」

「……………」

俺はただ美里の家を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7459h/>

真実の螺旋

2010年10月17日07時57分発行